KOICHI KISHI

TELE FUN KEN

ND-171

# 貴志康一

# 道頓堀・市場

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

指揮：貴志康一

# 貴志康一「道頓堀」「市場」

**指揮／貴志康一**
Koichi Kishi dirigent

**管弦楽／ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団**
Berliner Philharmoniker

第1面
**日本組曲から「道頓堀」**
Vergnügungsviertel in Osaka Aus der Japanischen Suite : III. Satz（6:32）

第2面
**交響組曲「日本スケッチ」から「市場」**
Markttrubel in einer Japanischen Stadt（6:48）

## 貴志康一の自作自演盤

貴志康一（1909－1937）は明治42年３月31日、大阪市桜の宮に生まれ、甲南小学校卒業後、甲南高等学校尋常科、高等科と進んだ。11才の頃から大橋純二郎とウェックスラーに師事してヴァイオリンを学び、大正15年ジュネーヴ国立音楽院に留学、昭和３年同校を首席で卒業した。そしていったん帰国し、京都、大阪で独奏会を開いたのち再び渡欧、ベルリンでカール・フレッシュに師事、昭和４年帰国して新進ヴァイオリニストとして活躍した。翌昭和５年、21才で三たび渡欧し、フルトヴェングラーに師事して指揮法を学んだ。また連続的に多くの作品を書き、ベルリン・フィルを指揮してそれらの自作品を発表するなど、まさに天才的な音楽家として、ベルリンで活躍した。昭和10年、26才で帰国してからは新交響楽団（現在のＮＨＫ交響楽団）を指揮、わが国ではめずらしい本格的な指揮者が登場したと絶賛を博したが、昭和12年11月17日、盲腸炎から腹膜炎を併発して阪大病院で急逝した。28才の若さだった。

以上は貴志康一記念室の発表した氏の略歴だが、この彗星のような音楽家を私が知ったのは、実はここに復刻された２曲のレコードからであった。もう40年近くも以前のことだが、当時レコード店で、この２枚のＳＰ盤を求めたときである。それらのレコードに付けられていたリーフレットも復製してここに添付されているが、ＳＰ盤の原盤番号から推定すると、1933／4年（昭和８～９年）の録音である。貴志氏はこの頃、ドイツ・テレフンケン・レコードに自作の管弦楽曲と管弦楽伴奏による歌曲を、自らベルリン・フィルを指揮して19曲も録音した。25センチＳＰ盤８枚と30センチＳＰ盤４枚である。

当時としてはまれにみる快挙というべきだろうが、そのうちの２枚２曲、すなわち「日本組曲」の第３曲「道頓堀」と交響組曲「日本スケッチ」からの第１曲「市場」は、貴志氏の帰国後にわが国でも発売された。付属のリーフレットによると「道頓堀」は貴志氏の在世中、「市場」は没後間もなく発売されている。つまり昭和10～11年と12年のことだが、こうして貴志康一指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団演奏の自作自演レコードは、ドイツ・テレフンケンのプレスによる12枚と、日本プレスによる２枚が残されたわけである。

現在、その全部が兵庫県芦屋市の甲南高等・中学校に設置された貴志康一記念室に保管されているが、これらを現在のＬＰ盤に復刻する計画は、1978年に同記念室が設けられて以来、私たちの希望するところだった。しかし今回わが国で既発売の２曲だけをこのようなＬＰ盤とすることになったのは、これらがわが国で発売されたときに、ドイツから取り寄せられた金属原盤が、キングレコード株式会社の尾久倉庫から発見されたためである。レコードにくわしい人なら御承知のことと思うが、シェラックのＳＰ盤と異なり、金属原盤は音の忠実度が高く、それを復刻した音の状態は非常によい。そこでキングレコードの好意によってこの２曲のＬＰ盤への復刻が実現したのである。

もちろんレコードの形態も機能も当時のＳＰと現在のＬＰでは著しく異なる。しかしレーベルやジャケットなどは往時の感覚を残すように配慮され、おそらく45年も前の録音とは思われぬほど鮮麗な音がきけるはずである。それによって貴志康一氏の快心の作品と演奏も、またあざやかによみがえることとなったが、これらの作品はわが国洋楽の興隆期の水準を越える傑作である。また黄金時代のベルリン・フィルを自在に駆使して、鮮烈な音楽をきかせる指揮のみごとさも　かつての貴志氏への数々の賛辞が決して誇張ではなかったことを証明している。わが国の音楽史を語る場合、このレコードは貴重な資料になると思う。

（小石忠男）

制作：甲南高等学校
兵庫県芦屋市山手町31－3
Tel. 0797－31－0551（代）
製造：キングレコード株式会社